

『禪宗綱目』の思想史的系譜

高柳 さ つ き

一 はじめに

証定（一一九四～？年）は明恵（一一七三～一二三二年）の弟子であり、禪宗に対する見解を華嚴宗の立場からの教禪一致として述べた『禪宗綱目』（一二五五年）を顕している。証定は、明恵に一二年師事し、その間に顕密と禪法の秘決を受けている。また、二〇代は高山寺で華嚴を学び、三〇代以後、明恵の教学の伝授を受け、『円覚経疏鈔』の講義を行つたらしい。『禪宗綱目』は、過去に大屋徳城（一九二八年）と鎌田茂雄（一九六五年）の研究がある。

大屋は、「華嚴列祖の判教に準拠して、禪を批判し、其の大綱を述べたるもの即ち『禪宗綱目』なり。されば、澄観、宗密、通玄等の外には殆んど一步も出ざるものというべく、何等新しき思想を発見する事能はず」と全く評価していない。⁽¹⁾ 鎌田は、「証定は明恵から澄観・宗密・李通玄の教学を受けつつ、当時の入宋禅僧などがもたらした新興宗教禅宗にふ

れ、華嚴の立場にたちつつ教禪一致を主唱しようとしたのであった。この背景には、当時教禪一致を説いた永明延寿の『宗鏡録』が円爾などによって講ぜられていた事実がある。（中略）しかしながら鎌倉禅の勃興にともなつて、教禪一致説はわが国では定着することなく捨て去られ、純禅の全盛時代となつたのである」と円爾に影響されて、華嚴の立場から教禪一致を説いた純禅時代までの過渡期的状況の中で著されたものとしている。⁽²⁾

これらの評価は顕密体制論以前の「(道元の)純粹禅が鎌倉時代の禅宗の主流で、兼修禅(諸宗兼修)はその過渡期にあった」という認識上でなされたもので、兼修禅が時代の主流であったことが前提となつた今では、『禪宗綱目』のそれは違つたものになると思われる。

本稿では、禅宗が円爾の聖一派(兼修禅)等を中心に発展していったという見解が論証されつつある現状のもとで、『禪宗綱目』の意義を問い直したい。尚、テキストは『鎌倉

旧仏教』（日本思想体系一五、岩波書店、一九七一年）所収による。

二 『禪宗綱目』の構成と内容

一・教禪の同異を弁じ、二・教外別伝を明かし、三・見性成仏を顕し、四・悟修漸頓を示し、五・諸流の見解を述ぶ、と五章から成る。

第一「教禪同異」

華嚴の五教判のうちの頓教と達磨禪に関しての同異である。同じ点は、澄観、宗密、彼等が属していた荷沢宗の主張によつて述べ、異なる点は『演義鈔』での十波羅蜜の解釈が頓教と禪宗（荷沢宗）と違う点、『円覚経略疏』の一切唯識一心が禪宗と五教に別々に配されている点などをあげている。

第二「教外別伝」

教外別伝というのは「言に即して言を亡ずるの謂なり」であるといい、解により行が成り、行が成つて解が絶するのが不立文字の意味にほかならないとし、『楞伽經』こそが達磨が衆生の心を印し、不立文字をあらわした經典であるという。

第三「見性成仏」

証定は、

所証無住故、能証無念也。能所俱泯、本心頓現、名見性成仏也。

（三九四上一〇～一一）

と見性を規定する。この本心頓現の本心とは無得で、この無

得である心体の空寂を悟れば仏の心に等しいという。

修行については李通玄の主張に基づき一念成仏を説き、荷沢宗の頓悟漸修を最高位に置く。この見性成仏は、無住を靈知不昧とし、心境の空寂を悟ることを重んじ、頓悟漸修を高位に置くとし、荷沢宗の主張に依拠している。

第四「悟修漸頓」

所悟、能悟、悟相の三門を立て、それぞれ漸門と頓門、定門と慧門、解悟と証悟があるという。さらに解悟と証悟に分けると、頓悟漸修は解悟、漸修頓悟は証悟、頓悟頓修のうち先悟後修は解悟、前修後悟は証悟、修悟一時は解悟と証悟に通じるとする。今の禪宗は、解悟からは頓悟漸修（荷沢宗）、証悟からは頓悟頓修のうちの前修後悟が相当し、解証を通じては頓悟頓修（牛頭宗）、無修無悟（洪州宗）で南宗が尊ぶところであるという。

第五「諸流見解」

諸聖の伝灯の漸頓は、同じく一心を伝えてきたことが禪の宗派による見解の相違があることを述べる。おおかた宗密の『禪門師資承襲図』に基づいて、南北二宗の見解、洪州宗と荷沢宗の見解の相違点、および牛頭宗の教説を明らかにする。

洪州宗と荷沢宗の相違点は、洪州宗は日常生活すべてが仏性といい、荷沢宗は妄念本寂、塵境本空であるが、本空の心、靈知不昧である空寂の知があるということところだという。

また、牛頭宗は諸法が本来無事とする。宗密は『禪門師資承襲図』で、荷沢宗の優位性を主張したが、証定は洪州宗と荷沢宗を同等と捉えている。

そして、最後に、上人の師承は誰かという問いに対し、明恵の『華嚴仏光三昧観冥感伝』を引用し、

答。彼秘伝云、愚僧盛年以来、深好「実行」、更不「事」浮花。或入深山、或時於「海辺」、松風為「宴坐之友」、朗月為「誦習之燈」。流「汗」列「涙」、独誦独修。仰「文殊」而乞「惠解」、帰「聖賢」而望「修行」、常作「此意」云、末代無「真善知識」。願諸仏菩薩冥垂「加被」。如「彼懷」幻時、無「所法」然發「中」四「禪」。依「宿善」遇「教法」、諸仏尽垂「哀悲」。即捨「名利之假法」、望「真実之修道」。誠心不「虚」、依「弥勒菩薩威神」、遂感「此禪法師」者、承久三年夏六月等云々。〔已上、不「可」輒「記」之。〕

余承「上人親訓」十二ヶ年、顯密伝授非「一」。遂至「貞応二年冬」、於「禪法」重伝「秘決」。疑情氷解本心月現。其口伝旨趣非「翰墨所」記。今載「大綱」、引「教文」為「其詮」。伝授之人聊爾莫「汚」他見。〔四〇〇上二一（二二）〕

明恵が弥勒菩薩の威神により感じた禪法を貞応二年（一二二三）に受けついだという。

三 従来の思想的位置付け

本テキスト執筆の目的は鎌田の言うように、「本書は禪の立場を明らかにするのではなくて、華嚴の立場から禪を融会

『禪宗綱目』の思想史的系譜（高柳）

しようとしたものである。そのためのよりどころとなったものが澄観・宗密の華嚴学であり、とくに宗密の思想であった⁽³⁾であることがわかる。また、大屋や鎌田が指摘しているように、本テキストには、李通玄の引用も多くあり、荷沢宗の影響を受けた澄観・宗密の系統の華嚴学と李通玄の華嚴学も取り入れて、澄観・宗密の伝統による華嚴と明恵の華嚴、密教を禪と結びつけようとしたものともいえよう。

だが、禪宗が勢力を伸ばしていく時期であり、その中心が円爾の聖一派であったことを念頭に置くと、より詳細に考えることができる。

四 『宗鏡録』の引用と「一心」思想

本テキストでは、荷沢宗が思想的に依拠する『宗鏡録』が多く引用されているが、これは達磨宗、栄西↓栄朝↓円爾系の禪でも禪と他教・他宗を思想的に結びつけるのに使われる（その際、『宗鏡録』で多用される「一心」、「靈知」がキーワードとなることは拙論⁽⁴⁾参照）。

第五の「諸流見解」の書き出しでは、

第五述「諸流見解」者、自「西域二十八祖」、至「震旦弘忍和尚」、諸聖伝灯漸頓雖「随」機、同伝「一心」。互無「有」紛諍。〔三九八上二六（一八）〕

とすべての祖師は「一心」を伝え、互いに争ったりすること

はないという。

そして、宗密の『禪門師資承襲図』を参考に、洪州宗と荷沢宗の違いについて解説する。

次述「洪州荷沢不同」者、同門下南嶽懷讓和尚弟子洪州馬祖意云、起心動念彈指動目所作、為_二皆是仏性全体之用_一、更無_二別用_一。（中略）不斷不修任運自然、名為_二解脫人_一。無法可_レ物、無_二仏無_レ作、猶如_二虚空_一。不_レ増不_レ減、何_レ仮_二添補_一。何以故。心性之外無_二一法可得故。但任_レ心即為_レ修也云云。荷沢神会和尚意云、謂諸法如_レ夢、諸聖同説。故妄念本寂塵境本空、本空之心靈知不昧、即此空寂之知。是前達磨初伝清浄心也。任_レ迷任_レ悟、心本自知。（中略）然知之一字衆妙之源。（中略）煩惱盡時、生死断絶、生滅滅已、寂照現前。応用無窮、名_レ之為_レ仏云云。（三九八下一）（三九九上二）

洪州宗はあらゆる行為が仏性で、あるがままを解脱といい、荷沢宗はすべての法は空で、その空は靈知不昧、空寂の知、根源的なことで、その知を認めて、煩惱が生滅すると表れてくるという。ただ、証定はどちらが正統であるとはいわない。

円爾の禪は臨済宗楊岐派（洪州宗系）であると同時に、『宗鏡録』の主張にのっとっており荷沢宗の影響を受けていた。証定はそこに明恵の観法（禪定）との接点を見出そうとしていたように思われる。

五 円爾の禪宗と明恵の坐禪観法

明恵の嗣法は無師独悟だが、その理由を末代に善知識がなく弥勒菩薩の威神に依って禪法の師を感じた、と明恵が傾倒していた弥勒信仰とつなげている。

ここでは坐禪のほかには観法という言葉も使われるが、「彼の秘伝である」以下が『華嚴仏光三昧観冥感伝』からの引用であること、承久三年（一二二二）夏の六月という記述から考え合わせると、華嚴仏光三昧観に他ならない。これは毘盧遮那・文殊・普賢の三聖と華嚴の仏光三昧の一致を唱える密教思想と華嚴の融会である。

この点は、大屋も同じ疑問を抱いて、明恵が行ったのは華嚴の観法であって、達磨系統の禪とは別であるという結論に達している。⁽⁵⁾

『明恵上人行状』には、明恵が宗密の著作を読み禪観を行っていたことが記されている部分もある。⁽⁶⁾しかし、明恵の観法は教禪一致の傾向はあるものの禪との結びつきが特別深いものだと考えにくい。

つまり、証定が明恵とその伝統を結びつけ、禪との関係性をより強く打ち出したというのが適切だと思われる。

六 まとめ

証定は唐代の華嚴宗が荷沢宗と関わりがあったことから教禅一致を導き、荷沢宗の教説を援用する円爾の聖一派が教禅一致を掲げる禅宗としてその流れの中に位置づけられることを示す論述をし、華嚴宗と明恵の思想を円爾の禅宗と関連づけようとしたのではないだろうか。

円爾の聖一派は禅宗興隆の中心であり、禅宗が勢力を広げつつある時期でもあった。また、諸宗兼修の聖一派は排他的ではなく、どの教・宗とも結びつくことができた。

『禅宗綱目』とは、証定が明恵の思想と澄観・宗密の華嚴の伝統を円爾の聖一派の思想潮流にあいまっていくために著したテキストと考えられよう。

- 1 大屋徳城「一九二八」『日本仏教史の研究三』東方文献刊行会、五〇九頁。
- 2 鎌田茂雄「一九六五」『中国華嚴思想史の研究』東京大学出版会、六三六頁。
- 3 鎌田前掲書六二九頁。
- 4 高柳さつき「二〇一〇」『達磨宗（能忍）から聖一派（円爾）に至る『宗鏡録』の一心思想の系譜』（『東アジア仏教研究』八号）。
- 5 大屋前掲書五二九頁。
- 6 『明恵上人行状』に「上人（明恵）其此、殊に円覚普眼章

『禅宗綱目』の思想史的系譜（高柳）

の尋思如実観乃至三重法界観等によって結業禅誦す」（『明恵上人資料第一』東京大学出版会、五〇頁）、「かくの如く両三年の間だ、練若台に蟄居して花嚴経によって結業坐禅す」（『明恵上人資料第一』五三頁）などというのが見られる。

〈キーワード〉『禅宗綱目』、諸宗兼修、聖一派、華嚴仏光三昧観（公益財団法人中村元東方研究所研究員）